

東京基督教大学紀要

キリストと世界

Christ and the World

第 36 号

東京基督教大学

Tokyo Christian University

2026 年 3 月

March, 2026

キリストと世界

第 36 号 目次

【学術論文】

「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至るダイナミズム
アウグスティヌスにおける自己変容としての霊的形成 …………… 須藤英幸 1

【書評】

庾凌峰著『民国期中国における賀川豊彦の受容（1920-1945）—新聞と雑誌資料による研究』……………岩田三枝子 27

【2024 年度 博士学位論文要旨】

ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示 …………… 永井創世 32

要約 …………… 34

2024 年度 大学院神学研究科神学専攻博士前期課程

修士論文・研究成果報告書一覧…………… 37

『キリストと世界』第 37 号 寄稿募集要項…………… 38

編集後記…………… 44

執筆者紹介…………… 45

Christ and the World

Vol. 36 CONTENTS

[Research paper]

The Dynamism from the Lament of an Unlovable Self to Love for God and Neighbor: Spiritual Formation as Self-Transformation in Augustine
..... Hideyuki Sudo 1

[Book Review]

庾凌峰著『民国期中国における賀川豊彦の受容（1920-1945）—新聞と雑誌資料による研究』 Mieko Iwata 27

[Doctoral Dissertation Summary]

The Presentation of the Jesus Traditions in James Sosei Nagai 32

Abstracts 36

Master's Theses in 2024 37

Call for Contributions to the 37th Issue of *Christ and the World* 41

Editor's Note 44

「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至るダイナミズム アウグスティヌスにおける自己変容としての靈的形成

須藤英幸

はじめに

キリスト教における「靈的形成」spiritual formation¹とは、信仰によって生きるキリスト者が、聖靈の働きを媒介に「キリストの似姿」imago Christiへ変容していく実践的・神学的プロセスを指す。現代の靈的形成論の方法論は、大きく分けて、実践的・心理的アプローチと、より体系的な神学的アプローチの二つに分類できる。靈的形成の実践や訓練の場として考えられるのは、祈り・聖書読解・黙想をはじめ、礼拝・聖礼典・交わり・奉仕などの信仰共同体、家事・子育て・介護といった家庭生活や支援活動、知的・文化的・社会的活動を含む各種サークルや職場、さらには災害協力・自治会などの地域共同体、人格全体を扱う教育現場、ボランティア活動や医療現場など多岐にわたる。したがって、多様な実践的アプローチに一貫した形を見いだすことは容易ではない。この全体的展望の不明確さは、靈的形成論が信仰者の間で広く受容されることを阻む要因の一つである。混沌とした現状にある実践的な靈的形成論に、理論的方向性を与えるものとして特に期待されるのが、体系的な神学的アプローチである。プロテスタント陣営の中で靈的形成を論じる現代神学者には、リチャード・フォスター²、ダラス・ウィラー

1 「靈的形成」spiritual formationという用語は、おそらく20世紀になってから用いられるようになった比較的新しい表現である。しかし、その概念自体は聖書に明確な根拠がある。たとえば、パウロは「コリント人への手紙 第二」3章18節で次のように述べる。「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたち εἰκόνι に姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」（新改訳2017）。ここには、キリストに似せられていく変容を強調するパウロの神学が明確に表明される。

2 Richard J. Foster, *Celebration of Discipline: The Path to Spiritual Growth*. San Francisco: Harper & Row, 1978. (リチャード・J・フォスター『スピリチュアリティ成長への道』中島修平訳、日本キリスト教団出版局、2006年)

ド³、ジェームズ・スミス⁴などがある。しかし、靈的形成論に関する歴史的発展の痕跡を軽視したまま彼らの理論を比較検討しても、神学的な靈的形成論の全体像を明確に描き出すことはやはり困難である。このような神学的靈的形成論における理論的見通しの不明瞭さが、今日においても主要な課題として残されている。

この課題に対処するためには、神学的系譜学の方法を適用することが有効である。一般的に言って、理論の歴史的発展を考えると、新しい論が白紙状態から生まれることは稀であって、通常は既存の伝統的理論を土台に築かれるものである。靈的形成論もまた例外ではない。現代神学者による理論的展開をたどるならば、その背後には、信頼できる伝統的な靈的形成論が確固たる基礎として存在することが明らかとなろう。プロテスタントの現代神学において、靈的形成の信頼できる理論的基盤を提供する神学者に、アウグスティヌス、ルター、カルヴァン、ジョン・ウェスレーの名前を挙げるができる。しかし、伝統的靈的形成論の内容理解がなお曖昧なままならば、仮に現代神学者の思想にその影響を見だしえたとしても、それをもって現代の靈的形成論についての理解が深まったとは言えない。したがって、現代の靈的形成論に明確な見通しを与え、現代社会に生きるキリスト者がその神学的有益性を実際に享受しうるようにするためには、伝統的な靈的形成論そのものの精緻な再検討が要請されるのである。

本論文では、伝統的な靈的形成論の中でも、アウグスティヌスの理論に焦点を当てて考察する。歴史的に言えば、靈的形成論には多様な伝統がある。「神化」*θέωσις* を志向する東方教父の伝統、あるいは、祈り・観想・共同体の修練を中核とする中世修道的伝統に対し、プロテスタント神学者が依拠するアウグスティヌスおよびルターの伝統は共通して信仰から愛へと至る靈的プロセスとして捉えることができる。アウグスティヌスに限って言えば、彼の靈的形成論の出発点は信仰者が実際に愛することができないことを嘆く「愛せない自己の悲嘆」であると考えることができる。したがって、アウグスティヌスの靈的形成論を正確に把握するためには、自己悲嘆から愛の実践が生み出される動態的視点からテキストを分析することが要請

3 Dallas Willard, *The Spirit of the Disciplines: Understanding How God Changes Lives*. San Francisco: Harper & Row, 1988. (ダラス・ウィラード『心の刷新を求めて—キリストにある靈的形成の理解と実践』中村佐知・小島浩子訳、あめんどう、2010年)

4 James K. A. Smith, *Desiring the Kingdom: Worship, Worldview, and Cultural Formation*. Grand Rapids: Baker Academic, 2009; *Imagining the Kingdom: How Worship Works*. Grand Rapids: Baker Academic, 2013; *You Are What You Love: The Spiritual Power of Habit*. Grand Rapids: Brazos Press, 2016.

されるのである。それゆえ本論文では、アウグスティヌスにおける霊的形成論を自己悲嘆から愛の実践へ至るプロセスと捉え、対比的に見れば、自己贈与と考えられるルターの理論に対して、アウグスティヌスのそれがどのような意味で自己変容であるのかを解明する。初めに回心の前提となる欲望と悲慘さの直視という問題を分析し、回心構造と救済構造を論じた後、彼の霊的形成論そのものの分析に進みたい。

1. 欲望の隷属化と深刻な悲慘さの直視

アウグスティヌスにとって、「欲望」libidoの隷属化を直視することは回心の出発点である。欲望の隷属化の直視とは、自らのうちに潜んでいる欲望に向き合い、欲望に打ち勝つことができない自己の現実を神の前で偽ることなく認めることである。『告白』(397/401年)第6巻には、アウグスティヌスの赤裸々な告白がある。

私は婚約相手でない別の女性を引き込んでしまった。なぜなら、私は結婚を愛する者ではなく、欲望の奴隷libidinis servusであったからだ。こうして、私の魂の病気morbus animaeは持続する習慣consuetudoに案内されつつ、いわば妻たちの王国〔すなわち結婚生活〕⁵に至るまで温存され引き延ばされて、癒されることのないままであるか、あるいはいっそう悪化したままであった。⁶
(『告白』6. 15. 25)

回心の10年後に執筆されたアウグスティヌス自身の回想録である『告白』には、彼の救済プロセスの理論が反映される。母モニカの勧めもあり、アウグスティヌスは長年同棲していた愛人と別れて、まだ子供のような少女と婚約する。しかし、法的に結婚が認められる年齢になるまでの二年間を待つことができず、アウグスティ

5 引用テキスト中の〔 〕は筆者の補足であることを示し、[]は文中で使用される代名詞の指示対象であることを示す。なお、本論文におけるアウグスティヌスの原典テキストにはCCSL(*Corpus Christianorum, Series Latina*)の他、出典が明記されない場合はPL(*Patrologiae Cursus Completus: Series Latina*)が用いられ、その翻訳はすべて筆者によるものである。また、本文中のラテン語表記法はPL版に従う。

6 *Confessionum* 6. 15. 25 (CCSL 27, 90): quia non amator coniugii sed libidinis servus eram, procuravi aliam, non utique coniugem, quo tamquam sustentaretur et perduceretur uel integer uel auctior morbus animae meae satellitio perdurantis consuetudinis in regnum uxorium.

ヌスは別の女性と性的関係を持ってしまう。執筆当時の司教という彼の立場を考えると、このような赤裸々な告白は驚くべきものがある。当然、欲望の隷属化という自己認識は事件当時のアウグスティヌスにおいても強く自覚されていたに違いない。

では、欲望の隷属化とはいかなる状態なのだろうか。『告白』第8巻では、「意志」との関係から次のように説明される。

[修辞学者ウィクトリヌスの回心] に対して私は嘆息していた。なぜなら、私は他人の鉄鎖によってではなく、自分の鉄鎖の意志 *ferrea voluntas* によって縛られていたからである。敵対者は私の意志を捉え、そこから私に対して鎖を造り、私を縛りあげた。確かに、ねじれた意志 *voluntas perversa* から欲望 *libido* が生じ、欲望に仕えるうちに習慣 *consuetudo* が生じた。そして、習慣に逆らわないうちに必然 *necessitas* が生じたのである。⁷ (『告白』 8. 5. 10)

アウグスティヌスによれば、欲望の隷属化は特有の意志的特性、すなわち「ねじれた意志」から生じる。ねじれた意志が原因となって「欲望」が生じ、欲望が温存されて恒常的な状態となる「習慣」が人間を隷属化するのである。この「肉的な習慣」*consuetudo carnalis* は「重さ」*pondus* であるとも表現され⁸、重さによる墮落が「必然」とも言われる。肉的な習慣の重さは人間を縛り付ける抗しがたい力であり、自力で欲望に打ち勝つことができないほど強力なのである。

だとすれば、神の創造の目的は人間を欲望の隷属化に貶めることなのだろうか。アウグスティヌスによれば、「不変的な善（意志）」*immutabilis bonus* を有する神がすべての善の原因である。初めの理性的被造物（天使であれ人間であれ）は確かに善意志を賦与されて創造されたが、それは神の似姿のような「可変的な善意志」であった。『エンキリディオン—信仰・希望・愛』（421/422年）では次のように説明される。

7 *Confessionum* 8. 5. 10 (CCSL 27, 119): Cui rei ego suspirabam ligatus non ferro alieno, sed mea ferrea uoluntate. Velle meum tenebat inimicus et inde mihi catenam fecerat et constrinxerat me. Quippe ex uoluntate peruersa facta est libido, et dum seruitur libidini, facta est consuetudo, et dum consuetudini non resistitur, facta est necessitas.

8 *Confessionum* 7. 17. 23 (CCSL 27, 107): et pondus hoc consuetudo carnalis.

[可変的な善意志 *boni mutabilis voluntas*] が理性的被造物における第一の悪、すなわち、第一の善の欠乏 *privatio boni* である。その後、さらに今や望んでいない彼らに、行為すべき事柄をめぐる無知 *ignorantia* と、有害な事柄をめぐる情欲 *concupiscentia* が忍び込んできた。それらの伴侶として、誤謬 *error* と苦痛 *dolor* が追加されたのである。⁹ (『エンキリディオン』 8. 24)

アウグスティヌスの人間理解には原罪が前提される。最初の理性的被造物には一般に自由意志と呼ばれる「自由な選択能力」*liberum arbitrium*¹⁰ が賦与されていたが、この自由意志は「可変的な善意志」の可変性のゆえに悪用される可能性があった。

[人間] は、極めて容易に守ることのできた自らの創造主の命令 *praeceptum* を、自分の能力を悪く用いることによって踏み超えてしまった。また、[人間] は、自分自身のうちにある自らの創造主の像 *imago* を、頑固にもその方の光に背を向けながら傷つけてしまった。さらに、[人間] は、その方の掟によって〔導入された〕健全な従属 *servitus* を、自由な選択能力 *liberum arbitrium* を悪く〔用いることによって〕断ち切ってしまった。¹¹ (『エンキリディオン』 8. 27)

アウグスティヌスによれば、最初の人間に与えられた命令は「極めて容易に守ることができた」ものである。しかし、彼らは自己の可変的特性のゆえに「自由な選択能力」を悪用して神の命令を破り、神との健全な信頼関係を自発的に放棄してしまったのである。これが、人間が最初に犯した罪、すなわち、意志の悪用としての原罪である。

このように、「第一の善の欠乏」は、「可変的な善意志」に付随する宿命的な特性であった。しかし、そこからあらゆる悪が生じようとも、善の欠乏が悪そのも

9 *Enchiridion ad Laurentium de fide et spe et charitate* 8. 24 (CCSL 46, 63): Hoc primum est creaturae rationalis malum, id est prima privatio boni. Deinde iam etiam nolentibus subintravit ignorantia rerum agendarum et concupiscentia noxiarum, quibus comites subinferuntur error et dolor, ...

10 Cf. *Enchiridion* 8. 25 (CCSL 46, 63).

11 *Enchiridion* 8. 27 (CCSL 46, 64): quae praeceptum sui creatoris quod custodire facillime posset sua male utens potestate calcavit atque transgressa est, quae in se sui conditoris imaginem ab eius lumine contumaciter auersa uiolavit, quae salubrem servitutem ab eius legibus male libero abrupit arbitrio, ...

ののではない。アウグスティヌスによれば、「善がまったく存在しないところには、いかなる悪も決して存在することができない」¹²。それゆえ、「[善]の中に現実の悪があるならば、それは損なわれた善、あるいは墮落した善 *vitiosum bonum* である」¹³と言える。したがって、理性的被造物による最初の罪は、外的な誘惑があったにしても、究極的には善なる自由意志の悪用によって犯されたことになる。最初の人間が原罪を犯した結果、人間の理性的能力には「無知」が、意志的能力には「情念」が強く影響を及ぼすようになった。さらに、前者からは「誤謬」が生み出され、後者からは「苦痛」が生み出された。このようにして、「人類全体としての有罪宣告された塊 *massa damnata* は、悪の中で倒れたりさらに転がり回ったりして、悪から悪へと投げ捨てられた」¹⁴のである。その結果、「理性的本性のすべての悲惨さ *miseria* が、あたかも泉から湧き出るように、充満にはなく欠乏に起因する、これらの病気から湧き出る」¹⁵ようになり、そうして、人類は「罪に由来する深刻な悲惨さ *miseria*」¹⁶の中で生きていかざるをえないと考えられた。アウグスティヌスはこの悲惨な状態を原罪による「死と有罪宣告 *damnatio* との罰」¹⁷と呼ぶ。したがって、「魂の病気」と呼ばれる欲望の隷属化から癒されるためには、その症状である深刻な悲惨さを直視することによって病気そのものの事実とその重大さを、すなわち、自分の中にある罪と罰を初めに受け止めなければならないのである。

2. 霊的形成の出発点としての信仰、および回心構造

アウグスティヌスによれば、原罪とその罰の影響下にある人類は、次のような明確な理由によって罪を犯さざるをえない。

12 *Enchiridion* 4. 13 (CCSL 46, 54): Nec malum unquam potest esse ullum ubi est bonum nullum.

13 *Enchiridion* 4. 13 (CCSL 46, 54): cui uero inest malum, uitiatum uel uitiosum bonum est.

14 *Enchiridion* 8. 27 (CCSL 46, 64): Iacebat in malis, uel etiam uoluebatur, et de malis in mala praecipitabatur totius humani generis massa damnata, ...

15 *Enchiridion* 8. 24 (CCSL 46, 63): Ex his morborum non ubertatis sed indigentiae tanquam fontibus omnis miseria naturae rationalis emanat.

16 Cf. *Enchiridion* 2. 7 (CCSL 46, 51): Quia enim de peccato graui miseria premebatur genus humanum, ...

17 *Enchiridion* 8. 26 (CCSL 46, 63): poena mortis et damnationis ...

私たちは二つの理由によって罪を犯す。一方で、行うべき事柄を私たちがまだ見ていないという理由によって。他方で、行われるべきだと私たちがすでに見ている事柄を行わないという理由によって。この二つのうち、前者は無知の悪 *ignorantiae malum* であり、後者は弱さの悪 *infirmittatis malum* である。¹⁸ (『エンキリディオン』 22. 81)

理性的被造物が福音に触れると、第一に「行うべき事柄」についての理性的知識を獲得する。この知識によって「無知」がいくぶんか解消され、人間の心には新しい意志が生まれ出る可能性が生じる。しかし、回心に至るまでの課題は「弱さの悪」、すなわち、「魂の病気」と呼ばれる欲望の隷属化である。『告白』第8巻で、アウグスティヌスはここでも「魂の病気」と呼ばれる意志の分裂について次のように説明する。

したがって、[意志]は十全な仕方では命じることができない。それゆえ、命じることが実現されない。というのも、もし意志が十全であったならば、それが生じるようにとは命じなかつただろう。なぜなら、すでに意志はあったからである。したがって、いくぶんか欲して *velle* いくぶんか欲しない *nolle* という状態は怪物などではなく、魂の病気 *aegritudo animi* なのだ。実際に、真理 *veritas* によって引き上げられているが、習慣 *consuetudo* によって押し下げられているので、全体としての[魂]が立ち上がらないのである。それゆえ、二つの意志が存在することになる。¹⁹ (『告白』 8. 9. 21)

一方で、「真理」によって新しい意志が生じ、他方で、欲望に仕える「習慣」によって古い意志が温存される。ここで言われる「魂の病気」とは魂全体が「自分の鉄鎖の意志によって」縛られた隷属化である。たとえ理性的知識によって健全な意志が

18 *Enchiridion* 22. 81 (CCSL 46, 94): *duabus ex causis peccamus, aut nondum uidendo quod facere debeamus, aut non faciendo quod debere fieri iam uidemus ; quorum duorum illud ignorantiae malum est, hoc infirmitatis.*

19 *Confessiones* 8. 9. 21 (CCSL 27, 126-27): *Non itaque plena imperat ; ideo non est, quod imperat. Nam si plena esset, nec imperaret, ut esset, quia iam esset. Non igitur monstrum partim uelle, partim nolle, sed aegritudo animi est, quia non totus assurgit ueritate subleuatus, consuetudine praegrauatus. Et ideo sunt duae uoluntates, ...*

心に芽生えたとしても、成長が妨げられて抑圧されてしまう状態である。

したがって、意志の分裂が解消されて回心に至るためには、外的契機としての神の恩恵が先行的に作用する必要がある。すなわち、欲望の隷属化から解放されるほどの効力ある神の呼びかけが要請されるのである。それが『シンプリキアヌスへ』(396/398年)で次のように述べられる。

なぜなら、もし [神] が彼ら自身を憐れもうと欲しさえすれば、彼らが動かされ moveri 理解し intellegi 従う sequi ことになるように、[神] は彼らに適している aptus 方法で呼びかけることができるからである。それゆえ、「呼びかけられる者は多いが、選ばれる者は少ない」(マタイ 22:14) というのは真実なのだ。²⁰ (『シンプリキアヌスへ』 1. 2. 13)

神の恩恵は、福音を聞く者の心に信仰を物理的に流し込むわけではない。むしろ、聞く者の心が動かされるような「彼らに適している方法で」、神はふさわしく「呼びかける」のである。この呼びかけが神の恩恵であるのは、結果的に福音を聞く者の心が神の呼びかけに「動かされ理解し従う」からである。

『シンプリキアヌスへ』には、アウグスティヌスにとって初めての主張となる恩恵的な回心論が含まれる。アウグスティヌスの霊的助言者でもあったミラノ教会の長老シンプリキアヌスが、『使徒のローマ人への手紙における諸問題の注解』(394-395年)の中で表明される回心論に関して彼に疑問点を伝えた。アウグスティヌスはそれを機に自らの回心論を再考し、意志的な回心論から恩恵的な回心論へ転じている。意志的な回心論は以下の構造であった。すなわち、「恩恵」 gratia は何の功績も存在していないときに与えられる神の「呼びかけ」であると解釈され²¹、呼びかけそれ自体に相違が見受けられないため「恩恵」は全ての人々に開放されていることになる²²。「呼びかけ」に対して応じるか否かは人間の自由意志にかかっており、その応答が、神の贈り物である聖霊が心に与えられるか、あるいは罰として心を頑

20 *De diuersis quaestionibus ad Simplicianum* 1. 2. 13 (CCSL 44, 38): quia si uellet etiam ipsorum misereri, posset ita uocare, quomodo illis aptum esset, ut et mouerentur et intellegerent et sequerentur. Verum est ergo: *Multi uocati, pauci electi*.

21 *Expositio quarundam propositionum ex epistola apostoli ad Romanos* 52 [60].

22 TeSelle, *Augustine the Theologian* (New York: Herder and Herder, 1970), 177.

なにされるかの分岐点となる²³。もし「呼びかけ」に応じるならば、功績として聖霊が与えられ、聖霊が愛を生み、愛がその者を憐れみ深くし、その者は憐れみから善を働くようになり、神は善行の報いとして永遠のいのちを与える²⁴。

『シンプリキアヌスへ』において、罪人を回心に至らしめるには聞く者に応じた恩恵的な呼びかけが与えられなければならないと主張されるようになった。一方で、外的契機として、神は全人類に対して呼びかけているが、他方で、ただ恩恵的な呼びかけによってのみ、聞く者が「動かされ理解し従う」ことになるような内的契機を、神は同時に彼らの心にもたらすのである。この内的契機が、次のように説明される。

しかし、何らかの呼びかけ *vocatio* によってでなければ、すなわち、何らかの事柄の証言 *testificatio* に触れられるのでなければ、誰が信じることができるだろうか。それによって彼の意志 *voluntas* が信仰へ動かされる、そのような内的光景 *visum* が彼の精神に迫ることを、誰が思い通りにできるだろうか。しかし、誰が彼を喜ばせる *delectare* ことのない何かを魂において抱擁するだろうか。あるいは、彼を喜ばすことができることに会うということ、あるいは、出会ったときに彼が喜ぶということ、誰が思い通りにできるだろうか。²⁵ (『シンプリキアヌスへ』 1. 2. 21)

人間には、外的契機としての福音の証言に対して、自分の心が実際にどのように反応するのかを正確に予測することができない。それは「無知の悪」の一部なのかもしれない。しかし、神には一切の「無知」が存在せず、聞く者を信じることに至らしめる、彼らにふさわしい呼びかけを与えることができる。神は信仰へ至らしめる外的動機と同時に内的動機を聞く者に与えることができるのである。したがって、神のふさわしい呼びかけとは、聞く者に与えられた「内的光景」を通して内的契機

23 *Expositio quarundam propositionum ex epistola apostoli ad Romanos* 52 [60]; 53 [61]; 54 [62].

24 *Expositio quarundam propositionum ex epistola apostoli ad Romanos* 52 [60]; 53 [61]; 54 [62]. 須藤英幸『「記号」と「言語」—アウグスティヌスの聖書解釈学』（教文館、2016年）187-188頁を参照されたい。

25 *Ad Simplicianum* 1. 2. 21 (CCSL 44, 53-54): Sed quis potest credere, nisi aliqua uocatione, hoc est aliqua rerum testificatione, tangatur? Quis habet in potestate tali uisio attingentem suam, quo eius uoluntas moueatur ad fidem? Quis autem animo amplectitur aliquid quod eum non delectat? Aut quis habet in potestate, ut uel occurrat quod eum delectare possit, uel delectet cum occurrerit?

としての喜びが同時に生じるような、外的契機としての「証言」なのである。「喜び」delectatio という魂の動きである「情動」affectusによって、証言の意味内容が単なる理性的知識から魂全体に影響を及ぼす「理解」intellectusにまで深められた結果、福音に触れることによって生じた新しい意志が支配的となって、神に「従う」ことができるようになる²⁶。

人間の心において、崇高な驚嘆にも近い「喜び」という情動のうちに受容された証言には、人間存在そのものの生き方を変えてしまうほどの可能性がある。福音の証言が「ふさわしい方法」で与えられると、聞く者の心のうちに崇高な驚嘆が引き起こされ、喜びを伴う理解が信仰を生み出すことになる。このように、アウグスティヌスによれば、信仰とは神の呼びかけに対する人間の意志的同意である。だとしても、それには常に神の恩恵の先行性という条件が前提されるのである。

3. 霊的形成の土台としてのキリスト信仰、および救済構造

アウグスティヌスにとって、霊的形成過程はプロテスタントが主張するいわゆる聖化プロセスというよりも、むしろ救済構造に内包されたプロセスである。そこで、まず彼の救済構造全体を明らかにしたい。上述したように、信仰は、欲望の隷属化と深刻な悲惨さを直視する人間に与えられた神の恩恵であった。この神の恩恵によって、信仰者には、原罪による「死と有罪宣告との罰」から解放されて、生まれ変わる道が開かれるのである。その道を歩むためには、第一に義を受け取って罪が赦される必要がある。なぜなら、義を受け取ることは救済の初めであり、罪が赦されることは霊的形成過程を現実に進み出すこと、すなわち魂の病気が癒され始めることだからである。では、信仰者が義を受け取って罪が赦される出来事とは、どのような事態なのだろうか。

したがって、私たちが義*justitia*とされるために、[キリスト]ご自身が罪*peccatum*となられた。[私たちが受け取った]義は、私たちの義ではなく神の義であり、私たちのうちにある義ではなく[キリスト]ご自身のうちにある義である。同様に、[キリストご自身が受け取った]罪は、彼の罪ではなく私

26 「喜び」と「理解」の緊密な関係性はアウグスティヌスの著作においてしばしば見受けられる。須藤『「記号」と「言語」』284頁を参照されたい。

たちの罪であり、彼のうちにある罪ではなく私たちのうちに置かれた罪である。[キリスト]は、肉において十字架に付けられたのであるが、[ご自分のいわば]罪の肉 *carnis peccati* の姿 *similitudo* によって次のことを示された。すなわち、[キリスト]のうちには罪がなかったので、彼が罪の姿であったところの肉に対して死ぬとき、彼はいわば罪に対して死なれたことになる。また、[キリスト]は肉の古さに従って生きることが決してなかったので、それによって私たちが罪のうちに死んだところの古い死 *mors vetus* から新しいいのち *vita nova* に生き返るようになることを、彼はご自分の復活によって証印された *signare* ことになる。²⁷ (『エンキリディオン』13.41)

第一に、「キリストの死と復活」は救済の根拠である。一方で、信仰者が受け取るのは「キリストご自身のうちにある義」であり、他方で、キリストが受け取るのは「私たちのうちに置かれた罪」である。それゆえ、信仰者は信仰を通してキリストの義を受け取り、彼らの罪はキリストによって赦されることになる。なぜなら、キリストの肉が「罪の姿」と見なされることによって、罪のないキリストの肉の犠牲が人間の「罪の肉」のための代償と見なされるからである。第二に、「キリストの死と復活」は霊的形成を可能ならしめる源泉でもある。「罪の肉の姿」を取られたキリストが十字架に付けられたのは「肉において」であるため、彼は「肉に対して死なれた」と言える。一方で、キリストが「罪に対して死なれた」ゆえに、キリスト者は「洗礼の秘跡」を通してキリストと共に罪に対して死んだ者となる²⁸。他方で、キリストの「復活」はキリスト者が「新しいいのち」に生き返るようになることの「証印」である。したがって、「キリストの死と復活」は、信仰者が「古い死」から、つまり「死と有罪宣告との罰」から解放されて、「新しいいのち」に生まれ変わることを可能ならしめるのである。アウグスティヌスの救済論は人間の中に義を作る

27 *Enchiridion* 13. 41 (CCSL 46, 73): Ipse ergo peccatum, ut nos iustitia, nec nostra sed dei, nec in nobis sed in ipso : sicut ipse peccatum non suum sed nostrum, nec in se sed in nobis constitutum, similitudine carnis peccati in qua crucifixus est demonstravit, ut quoniam peccatum ei non inerat, ita quodammodo peccato moreretur dum moritur carni in qua erat similitudo peccati, et cum secundum uetustatem peccati nunquam ipse uixisset, nostram ex morte ueteri qua in peccato mortui fueramus reuiuenscentem uitam nouam sua resurrectione signaret.

28 PL版では『エンキリディオン』13.41の最後に「このキリストの死と復活は、洗礼の秘跡を意味している」(Quod mors et resurrectio Christi sacramentum baptismi significat)と附記される。

ことだと一般に説明されるが²⁹、その前提に「洗礼の秘跡」を通して達成されたキリストの義の受領と代償の死による罪の赦しを考えられているのである。

救済の神的視点からの根拠が「キリストの義」だとすれば、その人間的視点からの根拠は神の恩恵によって与えられた「人間の信仰」となろう。アウグスティヌスによれば、救済の人間的根拠となる信仰は単に理性的に信じられた信仰であるというのではない。善良な生活と切り離された信仰に人間を救う力があるのだとは考えられていないのである。この問題が、『信仰と行為』（413年）において吟味される。

したがって、使徒〔パウロ〕が「人間は律法の行為がなくても信仰によって義認められる *justificari* のだと私は考える」（ローマ3:28）と言うとき、彼は、信仰が受け入れられて告白された後に、義の行為 *opera justitiae* が軽視されるべきなのだと主張するのではない。そうではなく、たとえ律法の行為 *legis opera* が先立たなかったとしても、信仰によって義認められることを誰であれ知るべきなのだと主張するのである。というのは、〔義の行為〕は義認められた者 *justificatus* に後続するのであり、義認められるべき者 *justificandus* に先行するのではないからである。³⁰（『信仰と行為』14.21）

ここで、アウグスティヌスは「律法の行為」と「義の行為」を区別して、パウロの信仰義認論を前者との関係に基づいた主張と見なす。すなわち、パウロは一方で「律法の行為」が信仰に先行しなければならないという考えに反対するが、他方で「義の行為」が信仰義認に後続しなければならないという考えに反対しているわけではない。それどころか、アウグスティヌスによれば、他の使徒たちと同様に、パウロにおいても「義の行為」が義認められることに要請されることになる。「それにもかかわらず、かの使徒〔パウロ〕も他の使徒たちと同じように、永遠の救い *salus aeterna* について善く生きる人々以外には与えられないだろうと考えていた」³¹と説

29 Cf. Alister E. McGrath, *Iustitia Dei: A History of the Christian Doctrine of Justification* (3rd ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1986; 2005), 45-49.

30 *De fide et operibus* 14. 21: Cum ergo dicit Apostolus arbitrari se iustificari hominem per fidem sine operibus legis; non hoc agit, ut percepta ac professa fide opera iustitiae contemnuntur, sed ut sciat se quisque per fidem posse iustificari, etiamsi legis opera non praecesserint. Sequuntur enim iustificatum, non praecedunt iustificandum.

31 *De fide et operibus* 14. 22: cum tamen et ille apostolus de salute aeterna, quae nisi bene viventibus non daretur, eadem sentiret, quae caeteri apostoli.

明される。アウグスティヌスはこの問題を次のようにまとめる。

同様に、パウロ自身もまた、神が信じられる信仰 *fides* ならばどんな種類のものであれ好ましいものであるとは考えずに、救いをもたらす *saluber* まさに福音的な *evangelicam* [信仰] を次のように定義した。すなわち、その行為が愛から進み出る、「愛 *dilectio* によって働く信仰」(ガラテヤ 5:6) と言われるものである。³² (『信条と行為』 14. 21)

アウグスティヌスに従えば、信仰でありさえすればどんな種類のものであれ人間を解放することができるという意見には同意できない。悪霊どもさえ恐れおののきながら、イエスが神の子であることを信じているからである。この「悪霊どもの信仰」は「恐れ *timor* によって絞り出される *exprimi* 信仰」³³ と説明される。これに対して、「愛によって働く信仰」は人間を真に解放することができるのだと主張される。

では、「愛によって働く信仰」とは何であろうか。別の言い方をすれば、「義の行為」が必然的に後続するようになる信仰とはどんなものだろうか。それは、端的に言えば、キリストに土台が置かれた信仰である。

「賢い建築家」の建造物において、「土台 *fundamentum* はキリストである」(1 コリント 3:10-11)。……しかし、もし [この土台] がキリストであるならば、それは疑いなくキリスト信仰 *fides Christi*³⁴ である。なぜなら、同じ使徒 [パウロ] が述べるように、「実際に、信仰によってキリストは私たちの心に宿っている」(エペソ 3:17) からである。さらに、もし [この土台] がキリスト信仰であるならば、それは確かに使徒が定義したあの信仰、すなわち、「愛によって働く信仰」(ガラテヤ 5:6) なのである。³⁵ (『信条と行為』 16. 27)

32 *De fide et operibus* 14. 21: sicut etiam ipse Paulus, non qualem libet fidem, qua in Deum creditur, sed eam salubrem planeque evangelicam definivit, cuius opera ex dilectione procedunt: *Et fides, inquit, quae per dilectionem operatur.*

33 *De fide et operibus* 16. 27: fides illa daemonum, ... quae exprimitur per timorem.

34 ここでは、*fides Christi* を「キリストに対する信仰」と解釈していて「キリスト信仰」と訳した。

35 *De fide et operibus* 16. 27: *Fundamentum Christus est in structura architecti sapientis; ... Si autem Christus, procul dubio fides Christi: per fidem quippe habitat Christus in cordibus nostris, sicut idem Apostolus dicit. Porro si fides Christi, illa utique quam definivit Apostolus: quae per dilectionem operatur.*

人間を解放することができる信仰は、キリストを土台にして歩む人々が信じる信仰である。アウグスティヌスによれば、土台がキリストであるならば、同時に「キリスト信仰」でもあり、さらに土台が「キリスト信仰」であるならば、同時に「愛によって働く信仰」でもある。したがって、「恐れによって絞り出される信仰」ではなく「愛によって働く信仰」こそが、キリストを土台とした救いをもたらす信仰なのである。明確に、アウグスティヌスは次のような信仰による救済論を宣言する。

したがって、キリスト信仰 *fides Christi*、すなわち、キリスト教的な恩恵の信仰 *fides gratiae christianae*、つまり、愛によって働くかの信仰が土台として据えられたならば、[キリスト]は誰ひとりとして滅びることを許さない。³⁶（『信条と行為』16. 27）

アウグスティヌスが展開しているのは、単なる信仰による救済論ではなく、キリスト信仰による救済論、あるいは、「愛によって働く信仰」による救済論だと言える。アウグスティヌスは恩恵博士と呼ばれるほど、神の恩恵を強調した教父であったが、この「愛によって働く信仰」こそ「キリスト教的な恩恵の信仰」なのである。「愛によって働く信仰」は、それが土台に据えられれば「キリストは誰ひとりとして滅びることを許さない」と宣言されるほど、圧倒的な救いの効力となるのである。

ところで回心は、恩恵的な神の呼びかけに対する人間の応答であった。それは、喜びという内的動機によって引き起こされた、外的証言に対する意志的同意である。さらに、救いをもたらす信仰は「愛によって働く信仰」であった。それは、意志の選択能力に依存する「義の行為」が必然的に後続するような信仰である。したがって、キリスト者の歩みには、キリスト信仰に土台が置かれた限りで、人間意志をどのように動かせるかが重要な問題となろう。『エンキリディオン』では、次のように説明される。

しかし、かの墮落 *ruina* の後では、神の憐れみ *misericordia* はいっそう大きい。なぜなら、選択能力 *arbitrium* そのものが、罪が死と共に支配している隷属状態 *servitus* から自由にされなければならないからである。[この選択能力]は、

36 *De fide et operibus* 16. 27: *Fides itaque Christi, fides gratiae christianae, id est, ea fides quae per dilectionem operatur posita in fundamento neminem perire permittit.*

決して自分自身の力によってではなく、キリスト信仰のうちに置かれた神の恩恵によってのみ自由にされる liberari。それは、〔聖書に〕書かれているとおり、意志 voluntas そのものが主によって備えられ、その意志によって、永遠の賜物にまで至らしめる、その他の神の賜物が獲得されるためである。³⁷ (『エンキリディオン』 28. 106)

アウグスティヌスによれば、回心が意志的同意であったのと同様に、キリスト者の歩みも意志に依存することになる。なぜなら、救いの目標である永遠のいのち（ここでは「永遠の賜物」と言われる）は、「意志」によって獲得される「その他の神の賜物」を媒介に与えられるからである。ただし、意志のねじれた意志からの脱却は「キリスト信仰のうちに置かれた神の恩恵によってのみ」可能になることを忘れてはならない。

では、救いの目標である永遠のいのちは、どのようにして獲得されるのだろうか。アウグスティヌスによれば、永遠のいのちは、信仰によってのみ与えられるものではなく、「善行」opera bona の「報い」merces と見なされる³⁸。この「善行」は「義の行為」とも呼ばれたものであり、「キリスト信仰」を通して自由にされた「意志の選択能力」によって達成されるのであった。では、永遠のいのちをもたらず善行は、キリスト者の自力による働きによって獲得されるのだろうか。

したがって、報いを受ける merita 人間の善 bona そのものでさえ神の賜物であると理解されなければならない。この善によって永遠のいのち vita aeterna が回復される時、「恩恵の上にさらに恩恵」(ヨハネ 1: 16) が回復されることでなくて、いったい何であろうか。³⁹ (『エンキリディオン』 28. 107)

これまでの議論より、アウグスティヌスによる救済構造を《①キリスト信仰→②義

37 *Enchiridion* 28. 106 (CCSL 46, 107): Sed post illam ruinam maior est misericordia dei, quando et ipsum arbitrium liberandum est a seruitute, cui dominatur cum morte peccatum. Nec omnino per se ipsum, sed per solam dei gratiam quae in fide Christi posita est, liberatur; ut uoluntas ipsa, sicut scriptum est, a domino praeparetur, qua cetera dei munera capiantur per quae ueniatur ad munus aeternum.

38 *Enchiridion* 28. 107.

39 *Enchiridion* 28. 107 (CCSL 46, 107): Intellegendum est igitur etiam ipsa hominis bona merita esse dei munera, quibus cum uita aeterna redditur quid nisi gratia pro gratia redditur?

の行為→③永遠のいのち》と考えることができる。第一に、回心によって獲得された「信仰」は神の恩恵によるものであった。次にここでは、善行である「義の行為」の報いとして「永遠のいのち」が与えられることを「恩恵の上にさらに恩恵」の出来事として捉えられているので、第二に、「義の行為」の達成と「永遠のいのち」の獲得も神の恩恵によることになる。このように、救済構造の全過程は神の恩恵によって成就されるのだと主張される。この神の恩恵の下で、義とされたキリスト者が、肉的な習慣にあらがいつつ隷属状態から自由にされた意志の選択能力によって「義の行為」を欲していく、そのような信仰がキリスト信仰、すなわち、愛によって働く信仰なのである。

4. 自己変容としての靈的形成

靈的形成過程は、救済構造《①キリスト信仰→②義の行為→③永遠のいのち》のうち「義の行為」を実現させるプロセスとして規定可能である。では、「義の行為」が神の恩恵の下で達成されるとは、具体的にどのような事態なのだろうか。『使徒のローマ人への手紙における諸問題の注解』では、信仰者に聖霊が与えられ、聖霊が愛を生み、愛がその者を憐れみ深くし、その者は憐れみから善を働くようになり、神は善行の報いとして永遠のいのちを与えるのだと説明された⁴⁰。このように、アウグスティヌスによれば、聖霊は信じる前にはなく信じた後に与えられることになる。『シンプリキアヌスへ』でも、信じていない者に「呼びかけられた者に信仰が吹き込まれる」⁴¹と説明されるが、聖霊が吹き込まれるとは主張されていない。したがって、「義の行為」の実践的展開としての靈的形成過程は、信仰ゆえにキリスト者に一貫して作用する聖霊の働きであることになる。他方、靈的形成過程は信仰・希望・愛のプロセスでもある。アウグスティヌスによれば、キリスト者を悪霊どもから区別する信仰の特徴が「キリスト信仰」に他ならず、「愛によって働く信仰」と言い換えることができた。なぜなら、「愛によって働く信仰」を実際に歩むことによって、悪霊どもが持ちえない希望と愛が生み出されるからである。したがって、靈的形成過程とは、聖霊の働きを受容しながら、「愛によって働く信仰」を実際に歩むことによって、すなわち、信仰から希望と愛へと具体的に前進することによ

40 *Expositio quarundam propositionum ex epistola apostoli ad Romanos* 52 [60]. 5, 11, 15; 53 [61]. 3-4, 7; 54 [62]. 1.

41 *Ad Simplicianum* 1. 2. 10 (CCL 44, 34): uocato inspiraretur fides ...

て「義の行為」を完成させていく生のプロセスであると言える。

『キリスト教の教え』（該当部分 396 年）では、このキリスト者が歩むべき生のプロセスが、心の情動や状態から《①神への恐れ→②敬虔→③知識→④勇気→⑤憐れみの助言→⑥純潔→⑦知恵》という七段階として説明される⁴²。この七段階は「イザヤ書」（11：2-3）の聖霊の働きが山上の垂訓（マタイ 5：3-10）によって説明される構造であり⁴³、信仰・希望・愛のプロセスである霊的形成過程が聖霊の働きとして捉えられている。この七段階をテキストに基づいて霊的形成過程の視点から整理すると、次のように表現できる。

- ① 自己の死すべき性と将来の死について深慮する
- ② 聖書の真実性に対する敬虔を深める
- ③ 神と隣人を神のために愛すべきことを発見し、自己を嘆き悲しむ
- ④ 過ぎ去る事柄の快樂から永遠の神の愛へ転向する
- ⑤ 隣人愛において自己を鍛える
- ⑥ 希望に満たされて、敵への愛まで至る
- ⑦ 平安に満たされて、神を十全に楽しむ

したがって、アウグスティヌスの霊的形成過程は《①罪人の自覚→②聖書への敬虔→③愛せない自己の悲嘆→④神への愛→⑤隣人への愛→⑥希望と敵への愛→⑦平安と神の享受》とまとめることができる。この霊的形成過程において第一に突破することが困難な過程は、《③愛せない自己の悲嘆→④神への愛》であろう。したがって、「神への愛」「隣人への愛」「敵への愛」をまとめて「神と隣人への愛」と表現すれば、この「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至る過程には、ある種の非連続性が見て取れる。アウグスティヌスによれば、この非連続性は「過ぎ去る事柄の快樂」から「永遠の神の愛」へ転向することによって乗り越えられる。ここでの課題は、この非連続性が乗り越えられる条件を分析して、霊的形成過程におけるダイナミズムを明らかにすることである。

具体的な議論への準備として、霊的形成過程を前進するために備えられたキリスト者の生来的能力を確認しておこう。

42 *De Doctrina Christiana* 2. 7. 9-11. 須藤『「記号」と「言語」』270-272 頁を参照されたい。

43 加藤武『*De Doctrina Christiana* (II, vii. 9-12) における迂路について』（『立教大学研究報告〈人文科学〉』第44号、1985年、26-44頁）26-36頁

疑いもなく、もし人間がすでに理性 *ratio* を用いることができる年齢であるなら、彼は欲すること *velle* をしなければ、信じること *credere*、希望すること *sperare*、愛すること *diligere* ができないだろう。さらに、彼は意志 *voluntas* によって走ることをしなかったならば、神の天からの呼びかけ *vocatio* に「値する」勝利に達することができないだろう。⁴⁴ (『エンキリディオ』 9. 32)

アウグスティヌスにとって、霊的形成過程を前進させることを可能ならしめる人間の能力は神の恩恵という条件下における「欲すること」、すなわち、「意志」に他ならない。「信じること」「希望すること」「愛すること」のすべてが人間の意志に依存することになる。彼によれば、最初の人間には「自由な選択能力」が賦与されていたが、墮落したときにそれは失われてしまった。しかし、キリスト信仰によって、神の恩恵の下でこの選択能力が回復されるのである。

霊的形成過程を前進するために備えられたキリスト者の原初的能力が「欲すること」だとすれば、その目標はどこに定められるべきだろうか。『エンキリディオ』の序論部分では、次のように説明される。

しかし、初めに精神が愛によって働く信仰に浸される *imbuta* と、[精神] は善く生きることによって、今や [心の目で] 見ること *speciem* に達しようと努める。そこでは、聖別され完全にされた心によって、言い表せないほどの美 *pulchritudo* が認識されており、この [美] を十分に見る行為 *visio* が至高の幸福 *felicitas* なのである。最初に何が存在し、最後に何が保持されるのかとあなたが尋ねる [問いの応答] は確かに次のようになろう。すなわち、信仰 *fides* によって始められ、見ること *speciem* によって完成される。というのも、これが全体の説明の要約だからである。⁴⁵ (『エンキリディオ』 1. 5)

44 *Enchiridion* 9. 32 (CCSL 46, 66): Cum procul dubio, si homo eius aetatis est ut ratione iam utatur, non possit credere sperare diligere nisi uelit, nec peruenire ad palmam supernae uocationis dei nisi uoluntate cucurrerit, ...

45 *Enchiridion* 1. 5 (CCSL 46, 50): Cum autem initio fidei quae per dilectionem operatur imbuta mens fuerit, tendit bene uiuendo etiam ad speciem peruenire, ubi est sanctis et perfectis cordibus nota ineffabilis pulchritudo cuius plena uisio est summa felicitas. Hoc est nimirum quod requiris, quid primum quid ultimum teneatur, inchoari fide perfici specie. Haec enim totius definitionis est summa.

ここでは第一に、「愛によって働く信仰」と「義の行為」との関係が明らかにされる。中世において一般化されていた「愛によって働く信仰」とは、「信仰」という質料に善行を通して「愛」という形相が加えられた完全な信仰であり、それが義とすることができる信仰と考えられた⁴⁶。これに対して、アウグスティヌスの「愛によって働く信仰」は「義の行為」が行われる以前に「初めに」与えられるものである。したがって、それは、一方で、希望と愛が必然的に生み出される信仰であることが含意され、他方で、「キリスト教的な恩恵の信仰」と言われるキリスト信仰として靈的形成過程の初めに与えられるものなのである。だとしても、「精神が愛によって働く信仰に浸される」と説明されており、愛せない自己を嘆き悲しむことを通して、信仰が少しずつ深められていくことが含意される。第二に、ここでは靈的形成の再定義を試みることもできる。すなわち、靈的形成とは、神を見ることができない現実世界の中で、神の恩恵の下で、最高美である神を「心の目で見ること」をめざしながら、最高善である神に基づく義の行為を「欲すること」によって歩む信仰生活を通じた信仰の成長と考えることができる。だとすれば、一方で、神の義を欲することが信仰・希望・愛を生み出す人間の原初的可能性であり、他方で、神を心の目で見ることに至高の幸福に至る人間の到達点である。後者は、上述した七段階で言えば、最終段階の「平安と神の享受」に当たるとも言える。アウグスティヌスによれば、幸福とはすべての人類にとって究極の目標として位置づけられるが、神を見ることができない現実世界において、至高の幸福は愛によって働く信仰の歩みを通して、すなわち、信仰に始まる希望と愛による靈的形成過程を通して探求されなければならない。したがって、アウグスティヌスの靈的形成論とは、至高の幸福への到達を希望として、欲望の満足を欲することから神の義を欲することへの意志の転向を通じた自己変容だと考えることができる。では、「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」が生み出されるようなキリスト者の自己変容が意志の転向として生じるためには、何が要請されるのだろうか。

第一に、キリスト者の自己変容が生じるためには、希望に促された祈りが必要である。「キリスト者の生」の七段階のうち「知識」の第三段階の説明を見よう。

というのは、この善き希望 *bona spes* の知識は、人間を自ら誇り高ぶる者にす

46 須藤英幸『ルターの恩恵論と「十字架の神学」—マルティン・ルターの神学的挑戦』（教文館、2024年）179頁、241-242頁を参照されたい。

るのではなく、むしろ自らを嘆き悲しむ者にするからである。そして、「嘆き悲しむ」情動 *affectus* によって、「人間」は熱心な祈り *sedulae preces* によって神の助け *divinum adiutorium* という慰め *consolatio* を獲得する。それは、「人間」が絶望 *desperatio* によって打ち碎かれないためである。⁴⁷ (『キリスト教の教え』2. 7. 10)

ここで言われる「善き希望の知識」というのは、聖書において命じられる二つの愛の教えを知ることである。「自分がこの世の愛に、つまり、はかない事柄への愛に巻き込まれており、聖書そのものが命じる限りの神への愛 *amor dei* と隣人への愛 *amor proximi* からどれほどはるかに懸け離れているのか」⁴⁸ を目の当たりにする人間は、絶望しないためにも神に希望を置かなければならない⁴⁹。アウグスティヌスは「この信仰の告白 *fidei confessio* から信心深い者たちの善き希望 *spes bona* が生まれ、この希望には聖なる愛 *caritas sancta* が随伴する」⁵⁰ と述べて、「善き希望」と「聖なる愛」が信仰から生まれ出ることを主張する。しかし、そのためには、第一に、キリスト者は自らの現実を「嘆き悲しむ」ことを通して、「神の助けの慰め」を受け取る必要がある。なぜなら、この悲嘆の「情動」が「熱心な祈り」を生み出し、それによって「神の助けという慰め」と共に永遠のいのちへの希望をも受け取ることになるからである。

第二に、キリスト者の自己変容が生じるためには、救いを完成されたキリストと密接に結びつこうと欲することが必要である。人間はキリストと密接に結びつくことによって、キリストと共に死んでいるといういわば可能態から、古い人としての自己の行いを主体的に殺していく⁵¹ という現実態がもたらされるのであり、それに

47 *De Doctrina Christiana* 2. 7. 10 (CCSL 32, 37): *Nam ista scientia bonae spei hominem non se iactantem, sed lamentantem facit. Quo affectu impetrat sedulis precibus consolationem diuini adiutorii, ne desperatione frangatur, ...*

48 *De Doctrina Christiana* 2. 7. 10 (CCSL 32, 37): *amore huius saeculi, hoc est, temporalium rerum, implicatum, longe seiunctum esse a tanto amore dei et tanto amore proximi, quantum scriptura ipsa praescribit.*

49 Cf. *De Spiritu et littera* 29. 51: *ex fide speramus in Deum ...*

50 *Enchiridion* 30. 114 (CCSL 46, 110): *Ex ista fidei confessione, ... nascitur spes bona fidelium, cui caritas sancta comitatur.*

51 次の聖句を参照されたい。「コロサイ人への手紙」3章5節「ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼

よって「ねじれた意志」と「肉的な習慣」から脱却する道が開かれることになる。なぜなら、キリストと密接に結びつこうと欲する者だけが、神の恩恵の下で靈的形成過程を前進する限りにおいて、神の義に向けて自由な選択能力が行使される可能性に開かれるからである。

したがって、キリストの十字架において、埋葬において、三日目の復活において、天への昇天において、また、父の右に座すことにおいて実行されたことは何であれ、次のことが果たされるために実行されたのだ。すなわち、これらの事柄のうちに生み出されたキリスト者の生 *vita Christiana* が、単に神秘的に語られるものとして *mystice dictis* ではなく、実際に実行されるものとして *gestis*、これらの事柄にかたどられるようになるためである。⁵² (『エンキリディオン』 14. 53)

アウグスティヌスにとって、「キリスト者の生」とは神の恩恵の下でキリスト信仰を通して靈的形成過程を前進させる生き方である。原理的に言えば、キリスト教はキリストの十字架・埋葬・復活・昇天・神の右への着座というキリストの事実を基礎に成立している。したがって、一方で、キリスト信仰とはこれらのキリストの事実によって基礎づけられなければならない。他方で、キリスト信仰をもつ者はこれらのキリストの事実がいわば自分の事実のように自分自身によって「実行される」ことを欲しなければならない。このようなキリスト者の意志そのものが靈的形成過程を前進させる能力であり、それによってキリスト者の自己変容が生じるのである。キリストの「十字架」とは欲望や情欲という古い肉を十字架に付けること、「埋葬」とは洗礼によって古い人が死ぬこと、「復活」とは新しいいのちに生きること、「昇天」と「神の右への着座」とはいのちが隠された天的靈的事柄を求めるべきことだと主張される⁵³。

第三に、キリスト者の自己変容が生じるためには、聖靈を全人的に受け取る必要

拜です」(新改訳 2017)。

52 *Enchiridion* 14. 53 (CCSL 46, 78): *Quicquid igitur gestum est in cruce Christi, in sepultura, in resurrectione tertio die, in ascensione in caelum et sedere ad dexteram patris, ita gestum est ut his rebus, non mystice tantum dictis sed etiam gestis, configuraretur uita Christiana quae in his geritur.*

53 *Enchiridion* 14. 53.

がある。キリスト者には今や神の義に向けられて自由な選択能力が行使される可能性が開かれたとは言え、キリストの事実が彼らの人生において具体的に実現されるようになるためには、霊的形成の全過程を通して聖霊の助けが必要になる。ペラギウス派駁論である『霊と文字』（412年）において、次のように説明される。

しかし、私たちはこう表明する。人間の意志 *voluntas* は、義を行うことができるように神によって次のような仕方であらう助けられる。すなわち、人間は自由な選択能力をもって創造されたこと、また、どのように生きるべきかという学び *doctrina* が〔人間〕に教えられたこと、これらに加えて、〔人間〕は聖霊 *Spiritus Sanctus* を受け取るようになること。この〔聖霊〕によって、〔人間〕の魂のうちに、かの最高にして不変の善なる方への、すなわち、神への喜び *delectatio* と愛 *dilectio* が生じることになる。依然として、〔人間〕は見ること *species* によってではなく信仰 *fides* によって歩んでいる。それは、〔信仰〕によって〔聖霊〕が無償の賜物の手付金のように〔人間〕自身に与えられることによって、〔人間〕が造り主と結びつこうとして炎をともし、さらに、かの真の光 *verum lumen* なる方への参与へと近づこうとして燃え立つためである。⁵⁴ (『霊と文字』 3.5)

ここでは、どのような神の助けによって、信仰を持った者が善なる義の行為を行えるようになるのかが説明される。第一に、人間の原初的能力として「自由な選択能力」が賦与されたこと。第二に、聖書によって何を行うべきかが教えられたこと。そして第三に、聖霊が与えられることである。聖霊は「キリストと密接に結びつこうと欲する者」を助けることができる。人間意志は「欲する」ことができるだけにすぎないが、聖霊を全人的に受け取った者は福音の言葉において「神への喜びと愛」という情動が全人的に生じるようになり、魂がキリストと結びつこうとして「炎をと

54 *De Spiritu et littera* 3. 5: Nos autem dicimus humanam voluntatem sic divinitus adiuvari ad faciendam iustitiam, ut praeter quod creatus est homo cum libero arbitrio praeterque doctrinam qua ei praecipitur quemadmodum vivere debeat accipiat Spiritum Sanctum, quo fiat in animo eius delectatio dilectioque summi illius atque incommutabilis boni, quod Deus est, etiam nunc cum per fidem ambulatur, nondum per speciem, ut hac sibi velut arra data gratuiti muneris inardescat inhaerere Creatori atque inflammetur accedere ad participationem illius veri luminis, ...

もし「燃え立つ」に至る。このように、神の義を欲することが信仰・希望・愛を生み出す人間の原初的可能性であったのに対して、聖霊によって生じうる「神への喜びと愛」が媒介となって、神の義を欲することから神の義を全人的に喜び愛することへダイナミックに変容する。換言すれば、自己悲嘆から神と隣人への愛が現実的に生み出されるのは、神の義を喜び愛することによって、分裂した意志が統一されることに由来する。他の箇所では「癒された魂 *anima sanata* が、罰の恐れによってではなく、義への愛 *amor iustitiae* によって善を働くようになる」⁵⁵と説明されている。つまり、欲望の隷属化によって分裂したままであった意志をもつ魂は、聖霊による癒しを通して全人的に神の義を愛するようになり、それによって善の行為を達成していく、そのような聖霊によるダイナミックな癒しの働きをここに見て取ることができる。

第四に、キリスト者の自己変容が生じるためには、神の愛が心に注がれている必要がある。霊的形成過程を前進することができるのは、聖霊を全人的に受け取った結果、神の愛が彼らの心に注がれているからでもある⁵⁶。

〔十字架によって神が愛を示されたのは〕 私たちも、私たちの悲惨さ *miseria* について正直に判断しながら、また、〔神〕ご自身が与えてくださった愛 *caritas* によって神を愛しながら、敬虔に *pie* そして正しく *recte* 生きるためである。⁵⁷ (『エンキリディオン』20. 76)

ここでは、大まかな霊的形成過程が示される。第一に、罪人の自覚が深まるほど、自分の悲惨さを認めるようになる。第二に、恩恵として与えられた「神の愛」から魂が動かされて、神を愛するに至る。第三に、神の恩恵と神への愛を通して、自分が「敬虔にそして正しく生きる」ことで隣人を愛するに至る。キリスト者が霊的形成過程を前進するためには、神の愛が心に注がれることが必要不可欠である。なぜなら、「神ご自身が与えてくださった愛」によって、キリスト者の心に「愛の根」

55 *De Spiritu et littera* 29. 51: ut anima sanata non timore poenae, sed amore iustitiae operetur bonum.

56 次の聖句を参照されたい。「ローマ人への手紙」5章5節「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」(新改訳2017)。

57 *Enchiridion* 20. 76 (CCSL 46, 90-91): ut et nos ueraciter de nostra miseria iudicantes, et deum caritate quam donauit ipse diligentes, pie recteque uiuamus.

caritatis radix と呼ばれる義の行為の源泉が植え付けられるからである⁵⁸。

第五に、キリスト者の自己変容が生じるためには、罪を犯してしまう原因が徐々に取り除かれる必要がある。霊的形成過程を前進するにつれて、罪を犯してしまう主な原因であった「無知の悪」と「弱さの悪」が徐々に取り除かれていく。

祈りを捧げられるべき方は、詩篇の中で「主は私の光 illuminatio、また私の救い salus」（詩編 26 [27] : 1）と述べられる方である。それは、〔神の〕光が〔私たちの〕無知を取り去り、〔神の〕救いが〔私たちの〕弱さを取り去るためである。⁵⁹（『エンキリディオン』 22. 81）

アウグスティヌスによれば、愛によって働く信仰の歩みを進み始めると、精神は「善く生きること」によって神を見ようと努めるに至る。キリスト者の心が徐々に神の光に照らされるようになり、同時に救いの確信が深められていく。これによって、「神の光が私たちの無知を取り去り、神の救いが私たちの弱さを取り去る」という魂の癒しが十分に生じるのである。

第六に、キリスト者の自己変容が生じるためには、回復された自由な選択能力が義の完成に向けて開かれている必要がある。

確かに、たとえかの聖なる証言を適切に把握する人々が〔完全な人間〕を〔聖書の中に〕まったく発見できないにしても、神には次のような可能性 possibilitas が欠如しているのだと決して言われるべきではない。すなわち、信仰に由来する義 justitia ばかりでなく、さらに、後ほど永遠において〔神〕の観想 contemplatio そのもののうちに生きられるべき義に基づく義でさえ、あらゆる点で完全にされるように、人間の意志 voluntas humana が〔神によって〕助けられる〔可能性が欠如しているのだと決して言われるべきではない〕のである。⁶⁰（『霊と文字』 36. 66）

58 *De Spiritu et littera* 14. 26.

59 *Enchiridion* 22. 81 (CCSL 46, 95): ille rogandus est cui dicitur in psalmo : *Dominus illuminatio mea et salus mea*, ut illuminatio detrahat ignorantiam, salus infirmitatem.

60 *De Spiritu et littera* 36. 66: Sane quamquam talem, si testimonia illa divina competenter accipiant, prorsus invenire non possunt, nullomodo tamen dicendum est Deo deesse possibilitatem, qua voluntas sic adiuvetur humana, ut non solum iustitia ista, quae ex fide

アウグスティヌスによれば、「愛によって働く信仰」とは、信仰者が回復された自由な選択能力を十分に働かせて、義の完成に向けて前進し続けることが可能になる、神の恩恵に助けられた信仰である。神の視点から言えば、罪人にすぎないキリスト者を助けて、義の完成に向けて前進させてくださる神の恩恵の力には限界を設定することができない。「というのは、力 *virtus* は弱さ *infirmitas* のうちで完全にされるからである」⁶¹ (2コリント 12:9)。

アウグスティヌスにおける霊的形成の特徴の一つは、たとえこの世界における歩みであっても、清くされた心にとって、神の「言い表せないほどの美」が十分に見られるという可能性に常に開かれている点にある。この世界におけるキリスト者の生が、神の恩恵による自己変容によって、まるで永遠の観想に向かって連続的であるかのように前進していく可能性が否定されていないのである。したがって、キリスト者は、永遠のいのちという非連続的な希望に加えて、目に見ることに依存しないかたちで神を見ることと肉体に依存しないあり方で神ご自身と結びつくことという連続的な希望を抱くことが可能となり、もしこれらが至福の幸福への希望として保持されるならば、確かにそれは自己悲嘆から神と隣人への愛を生み出していく強力な内的動機となるに違いない。

おわりに

アウグスティヌスの霊的形成論に関して、次の結論を得た。第一に、魂の病気である「欲望の隷属化」は信仰を通して癒されうること。第二に、回心とは、神の恩恵の先行性の下で、神の呼びかけに対する人間の意志的同意と考えられており、恩恵の働きという条件下で意志の働きが重視されること。第三に、「愛によって働く信仰」と呼ばれるキリスト信仰は、癒された意志の選択能力によって、「義の行為」を全人的に欲するようキリスト者を導くこと。第四に、信仰から愛が生み出されるために、神の恩恵によって、聖霊の助けとキリストとの一致による至福への希望がキリスト者の精神に生じること、さらに、回復された意志の選択能力が「義の完成」に向けて開かれていること。

以上より、アウグスティヌスの霊的形成過程は《①聖書への敬虔→②愛せない自

est, omni ex parte modo perficiatur in homine, verum etiam illa, secundum quam postea in aeternum in ipsa eius contemplatione vivendum est.

61 *De Spiritu et littera* 36. 66: *nam virtus in infirmitate perficitur.*

己の悲嘆→③聖霊の助けとキリストとの一致による至福への希望→④神と隣人への愛》と総括することができる。結果として、「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至るアウグスティヌスの靈的形成は、神の恩恵の下にある限りで達成可能となるような、自由な選択能力によるダイナミズムとしての自己変容なのだと言える。

【書評】

庾凌峰著『民国期中国における賀川豊彦の受容（1920-1945）—新聞と雑誌資料による研究』

ゆまに書房、2024年、275頁

ISBN：978-4-8433-6875-6、本体5,000円＋税

岩田三枝子

序

本書は、賀川豊彦（以下、賀川）（1888-1960）の中国大陸・台湾・香港における受容を、膨大な一次資料を基に丹念に明らかにした意欲的な研究書である。中国の賀川研究者である庾凌峰（ユ・リョウホウ）によって執筆された。評者は2019年、李善恵による著書『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か』（ミネルヴァ書房、2017年）の書評において、韓国における賀川評価に関する研究を取り上げた¹。本書は、その中国版ともいべき位置づけの研究であり、賀川の再評価が日本国内にとどまらず、国外にも広がっていることを示している。

1888年に生まれた賀川は、その青年時代にスラムでの活動を開始し、明治、大正、昭和を経て、第二次世界大戦後の1960年に至るまで、社会的活動やキリスト教宣教に取り組んだ。賀川の死後60年以上が経過した現在でも、その活動に対する再評価は続き、研究が進んでいる。

本書の構成

本書の序章では、賀川が1920年から45年の間に中華民国期の中国大陸を少なくとも8回、日本占領期の台湾を5回、イギリス占領期の香港を4回訪れたことが示される。各地域には賀川に関する新聞や雑誌記事、翻訳書が数多く残されているが、それらの資料を体系的に論じた研究はこれまで不十分であった。本書は、その「空白を埋める」（9頁）ことを目的としている。

序章に続く第I部では、中国に関する資料が取り上げられている。第一章では、

1 岩田三枝子「書評 李善恵著『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か』」（東京基督教大学『キリストと世界』第29号、2019年3月、218-221頁）

1920年の北京大学学生訪日団に団員として加わった黄日葵（1899-1930）に焦点が当てられる。抗日的な立場にあった黄は、賀川のスラムを訪れた際、彼の熱心な社会活動に深い感銘を受け、その思いを詩にして賀川に送ったエピソードが紹介される。

第二章では、中国のキリスト教運動「五カ年運動」の中心的人物であった誠静怡（1881-1939）と、賀川が日本で展開していた「神の国運動」との関係が検討される。賀川は誠の招きによって中国を訪れ、五カ年運動に友人として協力する。この両者の関係は、指導者と被指導者といった「序列関係」ではなく、「経験の交換と相互扶助」の対等な関係であったことが示される（79頁）。これらの章では、中国国内で独立運動が高まり、反キリスト教運動も展開されていた時代背景の中で、賀川と黄日葵、そしてキリスト者である誠静怡との民間レベルでの交流が丁寧に描かれている（67頁）。

続く第Ⅱ部では、中国の雑誌・新聞資料の記述をもとに、中国における賀川を受容像が明らかにされている。第三章では、『東方雑誌』と『大公報』を取り上げ、それぞれの誌面における賀川の扱いの違いが検討される。いずれも民国期において国民党政府寄りの立場を取っていた媒体だが、『東方雑誌』は1920年代をピークに賀川为社会運動に関心を示し、特に中国側に共感を寄せる賀川の姿勢に注目していた。一方、『大公報』も同じく1920年代には賀川の労働運動などに関心を寄せていたが、1937年の日中戦争以降は、賀川を「敵」とみなし、批判的な論調へと変化していったことが明らかにされている。

第四章では『大陸報』が取り上げられる。同誌も初期には、賀川为社会運動を肯定的に評価していたが、1936年に賀川がフォーラムでの質疑応答の中で「満州国」という表現を用いたことをきっかけに、その評価が一変し、不信感が強まっていく過程が示されている。これらの分析を通して、日中関係の緊張が高まるにつれ、中国における賀川の受け止められ方も大きく変化していったことが浮かび上がる。

第Ⅲ部では、これまでの賀川研究において十分に検討されてこなかった台湾と香港における賀川受容の様相が取り上げられている。第五章では、『台湾日日新報』を資料として用い、台湾における賀川受容の変遷が明らかにされる。賀川は台湾総督府の政策に批判的な立場を取っていたため、当局に直接的な影響を与える存在ではなかったが、その思想は台湾のエリート層に継承されていたことが示されている。

続く第六章では、『南華早報』を取り上げ、香港における賀川報道の変遷が検討される。香港での賀川に対する関心は、中国大陸や台湾よりもやや遅れて1930年

代に高まりを見せていた。香港の報道の関心は二つの側面に向けられており、一つは「神の国運動」を展開する宗教家としての側面、もう一つは協同組合運動における相互扶助の理念を掲げる社会活動家としての側面であったことが明らかにされる。

本書の意義

本書の意義は、主に次のような点にある。第一に、最大の特徴は、中国語による新たな一次資料を豊富に用いている点である。中国語に精通した研究者である筆者の強みが、十分に発揮されている。これにより、日本側や賀川本人の視点からではなく、中国大陸・台湾・香港といった地域側の視点から賀川像を描き出すことが可能となっている。また、これらの中国語資料を翻訳に頼ることなく筆者自身が直接日本語で語り、日本の読者に向けて提示している点も重要である。中国語と日本語の両言語に通じた筆者だからこそ可能となった研究成果である。

第二の意義として、本書は中国語に通じた筆者の強みを生かし、先行研究がすでに一定程度蓄積されている中国大陸における賀川の受容にとどまらず、これまで十分に研究が進んでこなかった台湾、さらにはほとんど未開拓であった香港における受容の実態にも光を当てている点で、大きな意義がある。特に、香港における賀川受容の実態を明らかにした点は、今後の賀川研究における新たな出発点として、極めて高い価値を持つといえるだろう。

第三の意義として、キリスト者ではない立場の筆者によって、賀川の台湾におけるキリスト教伝道の様子が語られている点も注目される。庾の本研究は、資料の追跡を通じて、「価値判断を避けながら、事実判断を行う」ことを意識した試み（211頁）であり、特定の分野や宗教的立場に偏らない点に特徴がある。先の韓国の李の著書は、キリスト者であり牧師でもある筆者の関心から、韓国における福祉分野と賀川との関係に焦点を当て、「信仰と実践の調和」として捉える視点が一貫していた。キリスト者であれば、心情的に賀川のキリスト教的側面に過度に注目してしまう傾向が否めないが、庾は、賀川の台湾訪問がキリスト教的枠組みに基づいていたことを踏まえつつも、特定の視点に偏ることなく、宗教的・社会的な垣根を越えて、キリスト者・非キリスト者の双方に賀川が影響を与えたこと（208頁）を示している。

また、筆者によって整理された『台湾日日新報』の記事一覧（135-139頁）や、賀川の台湾訪問日程一覧（162-163頁）も、今後の研究において高い利用価値を持つ資料といえる。さらに、中国大陸・台湾・香港という地域における当時の歴史的・

政治的・国際的・宗教的背景についても、必要に応じて適切に言及されており、それぞれの時代背景に必ずしも詳しくない読者にとっても、各資料がどのような文脈の中で賀川を取り上げていたのかを理解するための有益な手引きとなっている。

加えて、資料の綿密な読み込みによって、いくつかの新しい事実が明らかにされている点も注目に値する。たとえば、賀川と中国の最初の接点は、従来指摘されていた1920年8月よりも早く、同年5月にさかのぼること（53頁）、賀川の妻ハルが台湾訪問中に講演を行っていたこと（146頁）、1935年に胡漢民との間で3回目の会談が行われていたこと（192頁）などである。また、賀川が中国で日本の行為について謝罪を行ったこと（1934年3月10・11日）は広く知られているが、それに先立つ3月1日に香港で既に謝罪を行っていたという新たな事実（176頁）も紹介されており、筆者が先行研究を丁寧に踏まえつつ、これまで見過ごされてきた点を着実に掘り起こしていることが示される。

今後への期待

本書では、賀川の負の側面にも言及する。例えば、賀川の側から見た台湾像ではなく、『大陸報』が当初は賀川に好意的な報道を行っていたものの、彼が「満州国」を前提とした発言を行った後は、不信任を露わにしたこと（123頁）、あるいは台湾における賀川の優生思想的な発言（160頁）などである。このように、本書は賀川を無批判に礼賛するのではなく、当該地域の視点、つまりその国における当事者の立場から、客観的かつ歴史的資料に基づいて多面的に賀川像を描き出しており、極めて意義深い研究である。今後もこのように、当事者側の視点に立った研究を通して、当時の時代背景の中で生きていた賀川の言動を捉え直し、アジア諸国におけるその功罪をより立体的に明らかにしていくことが期待される。

終章において筆者は、今後の課題として「新資料の掘り下げ」に関する提言を行う。すなわち、「中国における賀川の全貌を探るには、さらに資料を深く掘り下げる必要がある」（216頁）とした上で、「1930年代～1940年代に中国共産党関係者が賀川をどのように見ていたか」（216頁）の解明を課題として挙げている点は、中国語資料に精通した筆者ならではの強みを生かした今後の研究として大きな期待を寄せたい。また今後の探求対象として、「中国近現代史のなかで、賀川思想と中国の近代化との関係」（216頁）が提示されている。本文では賀川の思想的影響を受けた台湾の人物・施乾（1899-1944）が創設した「愛愛寮」が、現在も「財団法人台北市私立愛愛院」の名称で高齢者福祉施設として活動を継続していることが紹

介されており（145頁）、こうした賀川思想の今日にまで及ぶ影響の掘り起こしも、今後の研究課題として期待できるだろう。

賀川研究が日本国内にとどまらず、特にアジア圏において広がりを見せていることは、非常に喜ばしい動きである。とりわけ、賀川が活動していた時代は、日中関係が極めてデリケートな時期であり、そうした国際的・政治的緊張の中で、賀川が個人としてどのような関係を築いていたのか、また一方で国家間の対立が彼の活動や思想表現にどのような影響を与えたのか、本研究を通して明らかにされている。まさに筆者が述べるように、「賀川豊彦という『個』をめぐる個人史を通して、日本史へ、さらに世界史の視点から（中略）『面』的に考察した」（210頁）という姿勢に見られるように、個人という「点」から、広い歴史的文脈という「面」へと視野を広げる作業が本書では試みられている。

このように、本書は中国語圏における賀川像を新たに描き出しており、今後の賀川研究にとって重要な礎となる意義深い研究成果である。

【2024 年度 博士学位論文要旨】

ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示

The Presentation of the Jesus Traditions in James

永井創世（ながい・そうせい）

ヤコブの手紙とイエス伝承との関連性については、これまで絶えず議論が続けられてきたが、その度合いについては未だに一致した意見がない。福音書に記される「山上の説教」（マタ 5：3-7：27）や「平地の説教」（ルカ 6：20-49）と多くの主題に類似性が見られるものの、イエス伝承への依拠を示す明確な引用定式はなく、さらに、福音書の記述と言葉上の一致も多くないからである。

このような課題に対し、これまでの研究者たちは、ヤコブの手紙の著者が用いた資料の特定を試みてきた。しかし、伝承過程が極めて複雑であるため、資料の特定は困難を極め、現在では行き詰まりを見せている。他方で、近年では、イエス伝承の提示の仕方に注目する研究がなされ、ヤコブの手紙の著者がイエス伝承を「自分自身のことば」で創造的に再提示しているという特徴が、ユダヤ人の知恵の伝統やヘレニズムの修辞学から説明されるようになった。これらの主張には一定の説得力があるものの、著者がそれらを実際に用いた証拠は十分ではなく、さらに、そのような提示の仕方を採用する積極的な理由について十分に説明しきれていない課題があった。

以上のような研究状況を踏まえ、本研究は、ヤコブの手紙が「語ること」に対し強い関心を持っている点に着目し、イエス伝承の提示の仕方に見られる特徴を、ヤコブの手紙における「語ること」に関する教えから説明できることを明らかにすることを目的とする。本研究は3部構成をとる。第1部では、研究の基盤を築くために、まず第1章で問題の所在と先行研究を概観し、課題を整理する。続く第2章では、ヤコブの手紙全体における「語ること」に関する教えをまとめ、考察する。特に、1章18節にある「(神が) 私たちを真実なことばによって生んだ」という言葉に注目し、著者が神のことばの「真実」という性質を強調し、聞くにも語るにも、「ことば」が実体を伴う真実性を持つことを要求していることを明らかにする。換言すれば、それは「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性の要求であり、手紙全

体を貫く思想となっている。

第2部では、第1部で明らかにした「語ること」に関する思想が、ヤコブの手紙の著者のイエス伝承の提示の仕方とどのように関わっているのかを具体的に検討する。第3章では、その分析・比較の概念ツールとして本研究が用いる言語行為理論について説明する。第4章では、手紙全体の中でも重要な位置にある5章12節の「誓いの禁止」とその並行箇所（マタ5:33-37）を取り上げ、分析・比較を行う。続く第5章では、ヤコブの手紙1章5節（マタ7:7;ルカ11:9）、2章5節（マタ5:3;ルカ6:20）、1章22-25節（マタ7:24-26;ルカ6:47-49）を対象に、さらなる分析・比較を行う。これらの分析を通して明らかになるのは、ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示の仕方は、著者自身の権威を重視し、読者に「行うこと」を強く要求する特徴があることである。この提示の仕方は、「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を強調する著者の思想と深く結びついている。また、著者が引用定式を用いない理由についても、著者自身が語る教えを実践する姿勢から説明が可能となる。特に、5章12節の「誓いの禁止」において、著者は神の名によって自身のことばの真実性を保証することを避けるよう教えている。著者はイエスの名を意識的に避け、あくまで自分自身のことばとして語ることで、「真実なことば」に生きること、すなわち、「聞くこと」「語ること」「行うこと」が一貫し、ことばが常に実体を伴う「真実」であることを体現していると考えられる。

第3部では、研究全体の成果をまとめる。第6章において、第1部と第2部から得られた結論を整理し、本研究の意義を提示する。本研究は、ヤコブの手紙とイエス伝承との関連性について新たな視点を提示するとともに、ヤコブの手紙のテキストそのものに根差した議論を展開している点に意義がある。また、ヤコブの手紙とイエス伝承のより深い結びつきを示唆するものでもある。ただし、未解決の課題も依然として残されている。中でも著者問題はヤコブの手紙の研究の重要な課題であるため、第7章において、本研究の結論を踏まえつつ考察している。

本研究を通じて、ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示の仕方と「語ること」に関する思想との密接な関連性が明らかになるとともに、著者自身が「真実なことば」に生きる姿勢を示していることが浮き彫りとなるのである。

論文 PDF URL: <https://tcu.repo.nii.ac.jp/records/2000153>

要 約

[日本語要約]

「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至るダイナミズム アウグスティヌスにおける自己変容としての霊的形成

須藤英幸

本論文では、これまで詳細に論じられてこなかったアウグスティヌスの霊的形成論を扱う。アウグスティヌスにおける霊的形成論を自己悲嘆から愛の実践へ至るプロセスと捉え、自己贈与と考えられるルターの理論に対して、アウグスティヌスのそれがどのような意味で自己変容であるのかを解明する。方法としては、自己悲嘆から愛の実践が生み出される動態的視点からアウグスティヌスの霊的形成論に関するテキストを分析する。具体的には、欲望の隷属化と深刻な悲惨さの直視、霊的形成の出発点としての信仰、霊的形成の土台としてのキリスト信仰、自己変容としての霊的形成を論じる。

アウグスティヌスの霊的形成論に関して次の結論を得た。第一に、魂の病気である「欲望の隷属化」は信仰を通して癒されうること。第二に、回心とは、神の恩恵の先行性の下で、神の呼びかけに対する人間の意志的同意と考えられており、恩恵の働きという条件下で意志の働きが重視されること。第三に、「愛によって働く信仰」と呼ばれるキリスト信仰は、癒された意志の選択能力によって、「義の行為」を全人的に欲するようキリスト者を導くこと。第四に、信仰から愛が生み出されるために、神の恩恵によって、聖霊の助けとキリストとの一致による至福への希望がキリスト者の精神に生じること、さらに、回復された意志の選択能力が「義の完成」に向けて開かれていること。結果として、「愛せない自己の悲嘆」から「神と隣人への愛」へ至るアウグスティヌスの霊的形成は、神の恩恵の下にある限りで達成可能となるような、自由な選択能力によるダイナミズムとしての自己変容なのだと言える。

キーワード：アウグスティヌス、霊的形成、自己変容、キリスト信仰、愛によって働く信仰

[Abstract in English]

The Dynamism from the Lament of an Unlovable Self
to Love for God and Neighbor: Spiritual Formation
as Self-Transformation in Augustine

Hideyuki Sudo

This article examines Augustine's theory of spiritual formation, a topic that has not yet been discussed in sufficient detail in previous scholarship. It interprets Augustine's account of spiritual formation as a process that moves from self-lament to the practice of love, and it clarifies in what sense Augustine's theory should be understood as self-transformation, in contrast to Luther's theory, which may be characterized as self-gift. Methodologically, the article analyzes Augustine's texts on spiritual formation from a dynamic perspective that traces how the practice of love emerges from self-lament.

The article reaches the following conclusions regarding Augustine's theory of spiritual formation. First, the "enslavement of desire," understood as a disease of the soul, can be healed through faith. Second, conversion is conceived as a human act of volitional assent to God's call under the priority of divine grace; thus, the operation of the will is taken seriously under the governance of divine grace. Third, faith in Christ, described as "faith working through love," guides believers, through the restored capacity of the will to choose, toward a wholehearted desire for "acts of righteousness." Fourth, in order for love to arise from faith, divine grace brings about within the believer a hope for beatitude through the assistance of the Holy Spirit and union with Christ; moreover, the restored capacity of the will is opened toward the "completion of righteousness." Consequently, Augustine's account of spiritual formation—from the "lament of an unloving self" to "love for God and neighbor"—can be understood as a form of self-transformation characterized by a dynamic of free choice, a transformation that becomes attainable only under the governance of divine grace.

Key Words : Augustine, Spiritual Formation, Self-Transformation, Faith in Christ,
Faith Working through Love

2024 年度 大学院神学研究科神学専攻博士前期課程 修士論文・研究成果報告書一覧

修士論文		
長濱 蒔人	研究教育	『沈黙』における神義論の展開と神学のおよび宣教的評価
柳生凌太郎	研究教育	アウグスティヌス型神義論の解体
金 炳一	研究教育	望ましい日韓宣教協力の研究 —日本同盟基督教団の韓国人宣教師の事例を中心に—
水山 裕文	研究教育	日本の戦後プロテスタント布教の転換点と今後の突破口
郭 太栄	研究教育	教会における信徒の心理教育 (ネガティブな感情について)
ブラウネル 礼	研究教育	Karl Heinrich Ritter, <i>A History of Protestant Missions in Japan</i> . リッター『日本プロテスタント・ミッション史』の研究
石原 俊一	研究教育	教職者の豊かな人間関係を目指して —短期療法を生かしたクリスチャンコミュニケーションに関する質的研究—
影山 茂	研究教育	教会へのイメージと意識に関するアンケートを用いた比較研究
関谷 勇祐	研究教育	とりなしの祈りを拒否する神 ～エレミヤ書における民の罪と、裁きに現れる神の性質～
西村 信幸	研究教育	福音主義の宣教協力—「キリストのからだ」を通して
市川 牧人	研究教育	マルティン・ルターの救済プロセスにおける肯定神学と否定神学 —ルターの「神の言葉神秘主義」をめぐる—
斐 秀營	研究教育	社会的養護下の子ども・若者を支えるためのミニストリーの提言 —施設暮らしをする子どもの人間関係の構築プロセスに関する質的研究を基に—
研究成果報告書		
川上 広樹	研究教育	宣教的教会論の日本における展開の可能性 ～地方宣教の課題と突破口に関する考察～
渡邊 愛結	研究教育	マタイの福音書 19 章 16-26 節 —富める青年とイエスの出会い—
呉 載炫	研究教育	ウェストミンスター信仰告白の改訂版批評 —日本長老教会へ初版採択の明言のための提言—
小尾 匡司	研究教育	メーベル・フランシス宣教師の聖理解の変遷
竹沢めぐみ	研究教育	主の祈りをめぐる聖書解釈 —オリゲネス、アウグスティヌス、ルターの教説—
李 コッボン	研究教育	塚本虎二と矢内原忠雄における「主の祈り」～「われら」の理解をめぐる

『キリストと世界』第37号 寄稿募集要項

発行予定年月

2027年3月

募集論文など

①学術論文、②研究ノート、③調査報告、④外国語学術文献の翻訳、⑤学術書籍の書評（福音主義神学の発展に貢献する建設的で批判的な内容で、原則、掲載号発行前5年以内に出版された学術書が対象）、⑥その他、委員会が必要と認めた原稿。いずれも未出版で、剽窃や盗用の疑いのないもの、二重投稿および不適切なオーサーシップに当たらないものに限り（二重投稿・オーサーシップの詳細は本学の「[研究論文投稿とオーサーシップに関するガイドライン](#)」を参照）。

学術論文

先行研究を踏まえて、当該分野において独創性・信頼性・有用性があり、論証がなされているもの。

研究ノート

論証はなされていないが、学術研究の課題や論文に発展する可能性のある独自性をもつ発想、人物紹介、問題提起等。

調査報告

- a. 当該分野において速報性が重要である報告等
- b. 新資料・重要資料等の紹介・解説
- c. 学術動向等の紹介・論評

論文等の分量

- ・前項①-③は24,000字（英文10,000 words）以内
- ・⑤は4,000字（英文800-1,600 words）程度
（いずれも図表・写真・注・文献を含む）

紀要の体裁等

- ・横書き、脚注とし、日本語を基本としますが、英語の執筆も可能です。
- ・縦書きや逆横書きを必要とする場合には、改行して記述し、図表の形式で記載するなどの工夫をしてください（縦書きに横書きを掲載する場合と同様）。
- ・英文原稿の場合は著者の責任においてネイティブチェックを行った原稿を提出してください。
- ・執筆の際の書式は、寄稿受け入れ後にお送りする「『キリストと世界』書式ガイド」

を参照してください。

執筆者の範囲

- ・ 本学専任教員
- ・ 本学非常勤教員
- ・ 本学博士後期課程在籍者
- ・ 前項までの研究者が行う研究課題の共同研究者
- ・ 本学専任教員を定年退職した者
- ・ 委員会が執筆を依頼した者

寄稿申込期限

- ・ 寄稿希望者は 2026 年 5 月 8 日（金）までに寄稿申込書を提出してください（期限厳守）。
- ・ あて先：東京基督教大学紀要編集委員会事務局（fcc@tci.ac.jp）
- ・ 記載事項：執筆者の氏名・ふりがな・所属・職名、論文等の種類、題名（仮題）、内容（200 字程度で）、字数、使用言語
- ・ 寄稿申込者には、委員会で審査のうえ、5 月末日までに寄稿受否の通知をします。寄稿受け入れの通知は掲載を保障するものではありません。
- ・ ⑤ 学術書籍の書評は、随時募集を行っています。掲載承認後に刊行する号に掲載します。

原稿提出期限

執筆者は 2026 年 9 月 11 日（金） までに完全原稿を提出してください（期限厳守）。

提出方法

- ・ E メールなどによる電子送稿とします。
- ・ 古代語等、特殊な書体、数式、図表等を使用する場合は、文字化け等がないことを確認した PDF を添付してください。

査読

- ・ 募集論文のうち、① 学術論文、② 研究ノートは委員会が委嘱した査読者により審査し、その結果に基づいて、A 掲載、B 修正後に掲載、C 不掲載、のいずれかを委員会で決定します。
- ・ ③ 調査報告、④ 外国語学術文献の翻訳、⑤ 学術書籍の書評、は委員会が掲載・不掲載の判断を行います。

紀要の編集権

- ・ 紀要の編集権は委員会にあります。

- ・編集著作物の著作権も委員会に属します。
- ・せっかく提出された論文等であっても、編集の都合上掲載できない場合があります。

著作権等

- ・原稿料、印税等はお支払いできません。
- ・個々の論文等の著作権は執筆者に属しますが、紀要の著作権は委員会に属します。
- ・本紀要は、刊行後、本学ウェブサイトにて公開します。
- ・個々の論文の内容に関する責任は執筆者にあります。

東京基督教大学 紀要編集委員会

Tel 0476-46-1131 / Fax 0476-46-1405 E-mail : fcc@tci.ac.jp

Call for Contributions to the 37th Issue of *Christ and the World*

Scheduled Publication Date

March 2027

Call for Academic and Other Papers

Christ and the World welcomes submissions of (1) academic papers, (2) research notes, (3) research reports, (4) translations of foreign-language academic literature, (5) reviews of academic books (constructive and critical reviews that contribute to the development of evangelical theology; in principle, reviews should be of books published no more than five years before publication of the issue in which they appear, and less than 1,600 words), and (6) Other manuscripts deemed appropriate by the editorial committee.

- The manuscript must be unpublished, free of plagiarism, not submitted elsewhere, and of appropriate authorship (for details on double submission and authorship, refer to TCU's "[Guidelines for Research Paper Submission and Authorship](#)").
- “Academic papers” are papers that, while building upon previous research, are original, reliable, useful, and well-argued.
- “Research notes” are the introduction of ideas, people, issues, etc., that have potential to be developed into a topic or paper of academic research, though they are not demonstrated in the submission.
- “Research reports” are
 - a. Reports, etc., for which rapid dissemination in the field is important.
 - b. Introduction and explanation of new and important materials, etc.
 - c. Introduction and commentary on academic trends, etc.

Length of Papers

Including figures, tables, photographs, notes, and references:

- (1)-(3) should be less than 10,000 words
- (5) should be 800 to 1,600 words

Style, etc.

- *Christ and the World* publishes mainly Japanese papers, but English submissions are also welcome. It is the author's responsibility to have the

manuscript proofread by a native speaker of English before submission.

- For stylistic and other guidelines, refer to the “Guidelines for Submitting Papers to *Christ and the World*,” which will be sent after the submission has been accepted for publication.

Eligible Authors

- (1) Full-time faculty members of TCU
- (2) Adjunct faculty members of TCU
- (3) PhD candidates at TCU
- (4) Researchers collaborating with contributors from among (1)–(3), above
- (5) Retired faculty members of TCU
- (6) Those invited to submit by *Christ and the World*'s editorial committee

Submission Application Deadline

Submit the submission application form by **Friday, May 8, 2026** (deadline to be strictly observed).

1. Send your submission application form to: Tokyo Christian University, *Christ and the World* Editorial Committee.
2. Provide the following information: name, furigana, affiliation, position, type of paper, title (tentative), content (around 100 words), number of words, and language used.

Applicants will be notified of the acceptance or rejection of their submission application by the end of May, after review by the editorial committee. Acceptance of a submission application does not guarantee publication of the manuscript.

Manuscript Submission Deadline

- Submit a complete manuscript in accordance with the submission guidelines by **Friday, September 11, 2026** (deadline to be strictly observed).

How to Submit

- Send the manuscript by email to fcc@tci.ac.jp
- When using special typefaces such as ancient languages, mathematical formulas, charts, etc., attach a PDF file that has been checked for garbled characters.

Submission and Peer Review

- (1) Academic papers and (2) research notes will be reviewed by peer reviewers appointed by the editorial committee. Based on these results, the committee will decide whether the paper should be published, not published, or published after revision.
- The editorial committee will determine whether or not to publish (3) Research notes, (4) translations of foreign-language academic literature, and (5) reviews of academic books.

Editorial Rights of *Christ and the World*

- The editorial rights of *Christ and the World* are held by the editorial committee.
- The copyright of edited works also belongs to the editorial committee.
- The editorial committee retains the right not to publish a paper due to editorial reasons even though after it has already been submitted.

Copyrights, etc.

- There are no payments for manuscripts or royalties.
- The copyright of each paper belongs to the author of that paper, but the copyright of *Christ and the World* belongs to the editorial committee.
- *Christ and the World* will be made publicly available on the university website after publication.
- The responsibility for the content of each paper rests with the author(s).

Tokyo Christian University, *Christ and the World* Editorial Committee

Tel: 0476-46-1131 Fax: 0476-46-1405 E-mail: fcc@tci.ac.jp

編集後記

『キリストと世界』第33号から編集委員長を引き受け、今年で4年目となった。この数年のあいだに、大学を取り巻く環境は一段と厳しさを増している。「もはや、じっくり研究している場合ではない」という空気が、学内に広がっているように感じられることも少なくない。そうした状況の中で、私自身、キリスト教における研究の意義をあらためて問い直さずにはいられない。

第一に、キリスト教研究とは、単なる「知識」の探求にすぎないのだろうか。私はそうは思わない。それは、キリスト者個人やその共同体を形づくったり育てたりすると共に、時にそれらを根底から刷新しうるような「知恵」を求める営みである。第二に、キリスト教研究とは、「信仰と対立せざるをえない理性」の営みなのだろうか。これについても、私は否と答えたい。むしろそれは、「信仰に根ざす理性」の営みである。ルターによれば、キリスト者には、生来的理性とは区別される信仰的理性が与えられている。互いに祈り合いながら、この信仰的理性を働かせていく研究は、究極的には、三位一体の神とその交わり、そしてその交わりに私たちが世界の中でいかに参与していくのかという問いへと私たちを向かわせてくれる。

「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました」(Iコリント1章27節、新改訳2017)。実際のところ、「この世の弱い者」にすぎない私にとって、研究を信仰の次元において深めていくとは、いったいどのようなことなのだろうか。「研究などは信仰に益をもたらすものではない」という声が、どれほど強く聞こえてこようとも、私自身は、「一見すると無駄に見える研究という道をふらつきながらも歩み進めていく、いわば『この世の愚かな者』となりきるほかはあまい」と、自らに言い聞かせている。

本号『キリストと世界』第36号には、須藤英幸による論文、岩田三枝子氏による書評、永井創世氏の博士学位論文要旨に加え、本学研究科の2024年度修士課程・修士論文・研究成果報告書一覧を収録した。編集委員会を代表して、執筆を担ってくださった諸氏の労に感謝するとともに、査読を快くお引き受けくださった方々、そして紀要編集に携わってくださったすべての方々に、心より御礼を申し上げたい。

紀要編集委員長 須藤英幸

【執筆者紹介】

須藤英幸 (スドウ・ヒデユキ)

フラー神学大学院神学研究科修士課程 (M.A. 神学)、京都大学大学院文学研究科博士前期課程、同大学院博士後期課程修了。文学博士 (キリスト教学)。大東文化大学非常勤講師、同志社大学嘱託講師などを経て、現在、東京基督教大学准教授。共立基督教研究所所長。著書に、『「記号」と「言語」—アウグスティヌスの聖書解釈学』(京都大学学術出版会)、『ルターの恩恵論と「十字架の神学」—マルティン・ルターの神学的挑戦』(教文館) 他がある。

岩田三枝子 (イワタ・ミエコ)

東京基督教大学神学部卒業。東京基督神学校、カルヴァン神学校 (Th.M.)、キリスト教高等研究所 (M.W.S.)、東京基督教大学大学院神学研究科博士後期課程修了。神学博士。現在、東京基督教大学教授。日本基督教学会、キリスト教史学会、賀川豊彦学会 (理事)。著書に『評伝 賀川ハル—賀川豊彦とともに、人々とともに』(不二出版) がある。

2025年度 紀要編集委員会

編集長 須藤英幸

編集委員 岩田三枝子

David Sytsma

齋藤五十三

徐 有珍

(五十音順)

編集事務 玉井美穂

編集協力 高橋伸幸

本誌のPDFデータは東京基督教大学機関リポジトリ (<https://tcu.repo.nii.ac.jp>)
及び本学ウェブサイト (<https://www.tci.ac.jp/info/overview/kiyo.html>) に掲載
しています。

キリストと世界 東京基督教大学紀要 第36号

2026年3月1日発行

発行 東京基督教大学教授会
東京基督教大学
〒270-1347 千葉県印西市内野3-301-5-1
TEL:0476-46-1131 FAX:0476-46-1405
<https://www.tci.ac.jp> E-mail: fcc@tci.ac.jp

組版 Print Bank (プリントバンク) 坂部紀恵子
〒116-0002 東京都荒川区荒川5-1-1-1003
TEL:03-5850-5337 FAX:03-5850-5338

(発行者の許可なくして無断転載を禁ず)